



コスモ・スワール うすだ

一人一人が輝き つながり 未来を拓く

修学旅行の名場面

9月の連休明け、6年生とともに1泊2日の東京方面への修学旅行へ行ってきました。華やかな観光地や東京の街並みなど、心に残る場面は数多くありましたが、今回の修学旅行の中で、私の胸を最も深く打ったのは、ある場面でした。

右の写真をご覧ください。これは、1日目の昼食会場と2日目の朝食会場で、子どもたちが食事を終えて席を立った直後のテーブルの様子です。

整然と並べられた食器、同じ種類ごとに美しく重ねられたお皿、そして小さくまとめられたお手拭きやごみ。それらはすべて、テーブルの通路に近い側にそっと寄せられていました。大人の目から見れば、単に「マナーがよく守られている」と映るかもしれませんが、しかし、この整えられたテーブルの姿をじっと見つめていると、子どもたち一人ひとりの静かな手の動きや、そこに込められた心の働きが見えてきます。

「次にこのテーブルを片付けるお店の方は、どう動くのだろう」「こうしておけば、少しでも手間が減るのではないか」

子どもたちは、誰に指示されたわけでもなく、目の前には見えない「お店の人」の動きや気持ちを想像し、自らの手でテーブルを整えたのです。そこにあったのは、「最高学年だから」「佐久市の代表だから」という言葉で縛られた義務感だけではありません。自分たちの行動がどこかで誰かにつながっていることを感じ取り、相手の立場に立って自発的に配慮しようとする、真の「責任感」と「誇り」の芽生えでした。

「場が人を成長させる」という言葉がありますが、ただその場所に身を置くだけ（「いるだけ」）では、人は自然に成長するわけではありません。子どもたちの内側にある「自分たちの手でこの旅を良いものにしたい」「周りの人に感謝を伝えたい」という切実な願いや意志と、日常とは異なる修学旅行という「場」が出会ったとき、その中に眠っていた優しさや潜在能力が、呼び水を得たように一気に開花したのだと感じたのです。

修学旅行を終え、学校へ戻ってきた子どもたちの顔を見つめると、行く前よりもどこかわずかに引き締まり、それぞれの目的や目標をやり切ったような、たくましく頼もしい表情に満ちていました。こうした子どもたちの素晴らしい立ち振る舞いは、決して学校の指導だけで生まれるものではありません。ご家庭で日常的に育まれてきた「物を大切にする心」や「働く人への感謝」、そして地域の中で温かく見守られてきた積み重ねが、修学旅行という舞台上鮮やかに花開いたものです。

命の襷

10月から子どもたちは、夏用の帽子から黄色いヘルメットへと切り替えて登下校しています。あの鮮やかな黄色には、単に「目立つため」を超えた深い祈りが込められています。かつて交通事故で大切なお子さんを亡くされたご遺族が、「同じ悲しみを二度と繰り返させない」という切実な想いから呼びかけられたのが、このヘルメットでした。いま子どもたちが頭にのせている黄色は、悲しみを乗り越えて託された命のバトンなのです。

何かに夢中になると周りが見えなくなるのは、子どもたちの純粋さゆえの姿でもあります。だからこそ、あの黄色は「ここに大切な命があります」と知らせるかけがえのない命のしるしとなります。ご家庭におかれましても、お忙しい朝の時間に「あなたの命より大切なものはない」という想いを込めて、温かく送り出していただければ幸いです。引き続きのご理解とご協力をよろしくお願いいたします。本校でも、このような話を全校放送で伝え、各学級でも繰り返し伝えていきます。



ぞっこん！さく市

10月3日、4日の2日間にわたる「ぞっこん！さく市」において、本校の4年3組、5年2組、6年1組の子どもたちが「CosmoTime（生活科・総合的な学習の時間）」の学びを発信いたしました。それまでのメディアの取材に加え、当日は多くの保護者の皆様、地域の方々、教育関係者の皆様が足をお運びくださり、子どもたちの言葉に耳を傾けていただきましたことに心より感謝申し上げます。

本校の「CosmoTime」では、大人が「どう教えるか」という枠組みにとらわれるのではなく、「子どもと共にやりゆきを楽しむ」ことを何よりも大切にしています。そこでは「教える側」と「教えられる側」という一方的な壁を取り払い、子どもも大人も互いの好奇心を差し出し合いながら、同じ視座に立って対話する場を目指しています。発信する子どもたちにとっても、参加してくださる皆様にとっても、共に心が動き、互いの引き出しが広がるような有益な時間でありたい。そう願って重ねてきた実践です。

今回のさく市の会場でも、まさにそうした同じ視座での豊かなやり取りが生まれていました。地域に足を運び自ら土に触れながら探究してきた入沢焼の歴史や文化について発表した4年3組では、地域の方から「粘土はどこでとれるの？」「ツルツルとザラザラの違いは何？」と問われた瞬間、子どもたちの目がパッと輝きました。暗記した知識を一方的に伝えるのではなく、自分たちが歩み、見て、感じてきた学びの引き出しをそっと開け、まるで大切な宝物を相手に手渡すかのように誇らしげに語りかける姿がありました。大人からの問いかけによって自らの学びが「自分だけの物語」として立ち上がっていくその表情には、自分の住む土地の文化に誇りをもち、共に面白がる喜びがあらわれていました。

また、出番を終えた5年2組のバックヤードに耳を澄ますと、『よかったよ』『上手にできたね』なんてフィードバックはいらないんだと語り合い、すぐに輪をつくって熱心に話し合いを始める姿がありました。ほめられて満足する関係で終わるのではなく、自分たちを真に成長させてくれる「耳の痛いアドバイス」こそが自らを鍛えてくれるのだと実感し、どうすれば来場者の方から本気の課題を引き出せるだろうかと模索していたのです。見栄えや上辺の評価にとらわれず、自らの学びを深めようとする背中には、自律した探究者としての逞しさが宿っていました。

さらに6年1組では、「学校に寄贈していただいた作者も題名もわからない作品について知りたい」という切実な問いを投げかけたところ、「その作品を書いた方に中学校で教えてもらったことがありますよ」という思いがけない声が届きました。その瞬間、「どこの方ですか？」「今どこにいらっしゃいますか？」「電話番号はわかりますか？」と一斉に身を乗り出し、自分たちの問いが一人の地域の方の記憶と重なって社会へとまっすぐつながっていく手応えを、子どもたちは肌で感じていました。

自ら動き出し、人に問いかけ、好奇心を差し出し合わなければ生まれない出会いと成長があります。昨年度から本校が大切に重ねてきた「CosmoTime」の豊かさを改めて噛みしめるとともに、子どもたちのコスモタイム物語（ストーリー）はここで終わりではありません。

11月21日（土）にコスモホールで行われる「信州教育の日」には、3年3組、4年3組、6年1組が参加し、CosmoTimeの過程を発信します。ぜひその生きた学びの現場に立ち会い、大きなステージで地域や他校の方々と交わされる言葉に耳を傾けていただければ幸いです。また2月には、保護者の皆様、地域の皆様、そして臼田中学校の教職員をはじめとする多くの教育関係者の方々をお招きし、全学級のCosmoTimeを発信する「CosmoTime Fes」を開催します。詳細につきましては順次お伝えしてまいります。

子どもたちの「知りたい」「伝えたい」という小さな芽は、大人がその思いを真摯に受け止め、同じ視座で問いかけてくださる温かな眼差しがあってこそ、深く豊かに花開きます。私も教職員も、子どもと共にやりゆきを楽しみながら、一人ひとりの子の小さなつばやきや葛藤、挑戦の姿を丁寧に読み解き、価値づけながら誠意をもって教育活動に取り組んでいこうと思います。

